設計競技応募案からみた 1930 年代における日本趣味建築の意匠的展開

「日本万国博覧会建国記念館設計競技」を中心として

TRANSITION OF 'NIHON-SHUMI(JAPAN-TASTE)' ARCHITECTURE IN THE 1930s

Through analysis of "Kenkoku Kinen Kaikan" architectural competition held in 1937

檜村 芙実*, 光井 渉**

Fumi KASHIMURA and Wataru MITSUI

'Nihon-shumi' architecture is recognized as a figurative architectural style of Japanese modern architecture representing Japanese identity through historicizing elements of Japanese temples, shrines or castles. This paper analyzes a transition of 'Nihon-shumi' design in the 1930s dealing with the 1937 Kenkoku Kinen Kaikan Competition for a main venue of 1940 World Exposition. In the competition, there were 2 major types of Nihon-shumi designs: one had narrow eaves on flat walls, which was a typical expression of Nihon shumi, and another had exaggerated Japanese traditional motifs out of wooden buildings like deep eaves, pillars of a cloister or Azekura wall.

Keywords : *Japan-taste, Architectural competition, architectural style, Showa-era*

日本趣味, 設計競技, 建築様式, 昭和時代

1. はじめに

本稿は、1937年(昭和12年)に行われた「日本万国博覧会建国記念館設計競技」(以下「建国記念館設計競技」と略す)¹⁾の分析を通して、設計競技応募案からみた1930年代における日本趣味建築の意匠的展開を検証するものである。

日本趣味建築についてはこれまで、日本の近代建築を扱う論の中で度々言及されてきたが²⁾、1930年代から戦時期にかけては、昂揚期とみなされる1930年代初頭の設計競技が特に注目され³⁾、その後の具体的様相は十分に検討されてきたとはいえない。1930年代には、戦時統制へと向かう中で様々な設計競技が行われており、中でも「建国記念館設計競技」は、国際的な大事業の中核建築を対象としたものであり、ここでの「日本」の捉え方を明らかにすることは重要な意味を持つものと考えられる。そこで本稿では、1930年代の建築における日本の表現を念頭に置き、特に1937年に行なわれた「建国記念館設計競技」を意匠的観点から分析することで、戦前の設計競技における具象的な日本の表現を、相対化して検証する視座を提供するものである。

なお、本稿で用いる「日本趣味建築」は、川道麟太郎・橋寺知子が示した定義⁴⁾に倣い、「我が国の近代の建築に日本建築の伝統的モチーフを具体的に施して日本の表現をとろうとするもの」を指し、いわゆる「帝冠様式」もここに含める。

2. 先行研究の視点

日本趣味建築は設計競技として試みられた事例が多く、これを対象とした研究は多い。設計競技を網羅的に扱った論としては、近江栄『建築設計競技-コンペティションの系譜と展望-』⁵⁾が挙げられる。ここでは、明治神宮宝物殿設計競技(1915年)をさががけとし、昭和初期の興隆期⁶⁾には、日本趣味設計競技の開催が際立って増加し華やかな論争を巻き起こしたが、その後は、近代建築主義との深刻な葛藤を展開し、次第に混迷に陥ったとしている。発生初期から最盛期にかけては具体的事例を挙げ、伝統的モチーフの扱い方などの意匠的な特徴を明らかにしているが、その後戦前期を通した検証は十分とはいえない。一方、設計競技実施案や競技を経ずに建設された建築の意匠を扱ったものとしては、大川三雄の論が挙げられる。「日本趣味への傾倒」⁷⁾の中では戦前の日本趣味建築の昂揚期を二期に分け、一期は帝国議会議事堂をめぐる論争が起きた明治末期から大正にかけて、いまひとつは昭和戦前期を挙げ、中でも東京帝室博物館実施案の意匠の完成度の高さから、これをひとつのピークとしている。また、「日本趣味の潮流」⁸⁾の中では、その後の意匠的展開にも目も向けており、軍人会館に端を発する意匠が愛知県庁舎(1938年)や、関東軍司令部(1935年)などの満州国の建築の意匠に引き継がれたとし、その詳細を明らかにしている。この論考は、実施案に基づいて1930年代の日本趣味建築の傾向を明らかにしたものであるが、設計競技応募案などで実験的に展開した日本趣

* 東京藝術大学大学院美術研究科

専門研究員・修士(美術)

** 東京藝術大学美術学部建築科 教授・博士(工学)

Research Assoc., Graduate School of Fine Arts (Architecture), Tokyo University of the Arts, M.Fine Arts

Prof., Faculty of Fine Arts, Dept. of Architecture, Tokyo University of the Arts, Dr.Eng.

味建築の意匠に対する考察は十分とはいえない。

さらに、昭和戦前期の特に1930年代初頭に目を向けた論としては、藤岡洋保「昭和初期の日本の建築界における『日本的なもの』」⁹⁾が挙げられる。合理主義を標榜する建築家が提唱した日本の表現を論じる中で、日本趣味建築を相対的に定義している。これも昭和初期における両者の理念の対立を言説から丹念に解き明かしているが、以降の日本趣味建築の展開については言及していない。

一方、1940年代初頭を扱った論としては、布野修司「国家とポスト・モダニズム建築」¹⁰⁾が挙げられよう。この論考では、大東亜建設記念堂設計案や在盤谷日本文化会館設計競技における前川國男・丹下健三案の勾配屋根を配した案に関して、近代建築主義に立脚した視点から論じているため、これを日本趣味建築とは断絶したものとして扱っている。また、意匠的な特徴を「勾配屋根」の有無に集約しているため、屋根以外の意匠の細部については検討を行っていない¹¹⁾。その他の論考においては、前川案・丹下案を肯定するものや批判するものそれぞれあるが、肯定するものは、日本趣味建築における具象的な表現といかに異なるかを論じることでこれを擁護し¹²⁾、批判するものは、勾配屋根を用いたことを「妥協」¹³⁾「信条をむりやりにねじまけた苦渋の姿」¹⁴⁾などと表現し、戦時のやむを得ない選択であったとみなしており、いずれの論も日本趣味建築とは根本的に断絶しているという見解と、意匠的検討が希薄であることは共通している。

しかし、両者の間に位置する1930年代には数多くの設計競技が実施され¹⁵⁾、日本的表現に関しても様々な試みが行われている。中でも建国記念館設計競技は、国家のシンボルとしての意味を強く持つ万国博覧会の中心的建築物を対象とした設計競技である。この中で、どのような日本的表現が試みられたのかという命題は重要な意味を有するはずであるが、これまでの研究では、応募案中に神社をモチーフとする案が出現したことを説明するにとどまっている¹⁶⁾。そこで本稿は、1930年代における日本的表現を念頭に置き、建国記念館設計競技応募案を意匠的観点から分析するものである。本稿では、『建築雑誌』に加えて、これまで十分な検討が行われていない『紀元二千六百年記念日本萬國博覧会肇国記念館懸賞競技設計図集』(以下『図集』と略す)¹⁷⁾と万国博覧会誌であった『万博』¹⁸⁾を用いて、案を特徴づける募集規定の再検討を行なった上で、応募案に選択されたモチーフの由来や分類に留まらず、それらの「形」をどのように解釈し扱ったかという設計者の視点から、意匠を検証する。

3. 募集規定にみる審査側の意向

1937年に行われた建国記念館設計競技は、鉄骨造の建築に日本的な建築様式を求めた、典型的な日本趣味建築設計競技であり¹⁹⁾その対象建築物は、1940年3月から8月を会期として計画されていた万国博覧会の「主標」となる建築物である²⁰⁾。万国博覧会は、1936年11月、紀元2600年記念行事の一貫として開催が決定しながら、1937年7月16日、開催延期が発表され、会場建設も中断した²¹⁾。

会場のひとつであった建国記念館は、設計競技終了後一等当選案に基づいて実施設計が進められていたが、1938年6月20日に着工した記録が残されているものの²²⁾、完成には至らなかった。建国記念館設計競技案は1937年11月1日正午を締め切りとして公募され、遅延を含み計108案が提出された²³⁾。審査は11日・12日の2日間行われ、

入選・当選を選出、12月15日には賞金贈呈式が行われた²⁴⁾。

建国記念館は延床面積9,900㎡の複合施設で、絵画室と呼ばれる1,500㎡の展示室、2000人を収容する集会ホール、食堂などを有し、建設費は150万円が計上された。22,500㎡の広場を前面に持ち、会場正門の正面に位置する象徴的な立地である。募集規定は『建築雑誌』に抜粋が掲載されたが、全文は応募志望者にのみ配布されており、ここから、従来の日本趣味建築設計競技に特徴的な、様式を規定する語や、参考平面図、審査員の顔ぶれを確認することができる。

建国記念館の様式に関しては「建築様式は日本精神を象徴したる莊嚴雄大なるもの」と規定された。1930年代の日本趣味建築設計競技において用いられていた様式を表す用語は「日本趣味」「東洋趣味」などであり²⁵⁾、「日本精神を象徴」という文言は、これまで見られなかった独特の表現である。しかし、当選者の言葉にも示されているとおり、「特に苦心を要した点は(中略)建築意匠に対する観念、即ち最も適切なる外観様式を創案、決定すること」・「一番苦心しましたのは矢張り様式」など²⁶⁾、この用語によって従来の日本趣味建築設計競技が要求してきた外観意匠を重視した日本的表現を競うものであると認識されていた事が窺える。

この他に、「敷地の周囲」の条件も特徴的である。「第四号地会場各館の建築様式は日本趣味を基調とし、第五号地会場各館は現代自由様式に依るものとす」と規定され、万博ならではとも言える様式の対比が演出される計画であった²⁷⁾。また、「建築構造」を記した項目には主要構造を鉄骨構造とすると共に、「主要なる屋根は勾配屋根」と指定された。勾配屋根は日本趣味建築の特徴とされるが、これを要項に記載した設計競技は他に例がない²⁸⁾。日本趣味建築設計競技の目的が、時代を牽引する唯一の新様式を求めることにあった大正期とは異なり、勾配屋根を持たない建築意匠の存在を認めた上で、あくまでも勾配屋根を配した建築を求めようとしていたといえよう。なお、建国記念館は万国博覧会終了後に移設するとされており、この「移設」が鉄骨造の理由と推測される。

建国記念館設計競技で示された参考平面図の概形はT字で、中央正面部分がやや前方に突出している(図1)。一階は自然光を必要とする「食堂」及び「大委員会室」、中央の階段とスロープを上って二階が主出入口となり、左右に「絵画室」を設け、三階には中央に「便殿」、両翼は「絵画室」上部の吹き抜けである。

図1 参考平面図 一階

この参考平面図は、あらかじめ審査側が作成した平面図を応募志願者に送付し、計画の際の参照とさせるものである。あくまでも参考に留め、アレンジしても良いという意向は示されるものの、当選者の多数がこれを踏襲しており、その拘束力は強かったといえる。結果的に平面図は参考図と大きくは異ならない範囲で儀礼的に考察を行い、外観意匠に主眼を置いた立案がなされた。このような傾向は、1930年代初頭における設計競技の常套であったが、同時期には平面図の提案を積極的に求めた神戸市公会堂設計競技(1935年)なども実施されており、外観意匠のみを問うことを疑問視し、これを打開しようとする試みも行われていた²⁹⁾。しかし神戸市公会堂設計競技審査評では、当選の外観意匠には「一も満足すべき優秀なるものにあらざる」³⁰⁾と遺憾の意を表し、その原因を「平面計画にその主力が注がれ、外観の方面にその技を振う余裕少なかりしに起因する」ものと推測しており、平面計画・外観意匠を同時に問えるほど応募者の技量が成熟していないとみなされていた。このような試みを経て、建国記念館設計競技では参考平面図を配布することで、外観意匠を重点的に審査するという審査員の方針があったと推測できる。

審査員は、佐野利器を委員長とし内田祥三・大熊喜邦・佐藤功一・武田五一を含めた9名であった³¹⁾。日本趣味建築設計競技には常連の審査員がおり、要項に様式を要求する記述が無くても、審査員の顔ぶれから応募者が「日本趣味」を要求されているものと判断できる設計競技が1930年代初頭には行われていた。近江柴は明治神宮宝物殿設計競技や日清生命館設計競技などを例に挙げ、佐野利器・内田祥三・佐藤功一がこれにあたり、このうち二人が組むと必ず日本趣味建築が現れるとしている³²⁾。

確かに、佐野利器、佐藤功一が審査を行った1935年実施の朝鮮25周年美術館設計競技は、敷地こそ国内ではないが、募集要項・当選案に見られる傾向は日本趣味のそれであった(図2)。一方で、1936年に実施された愛育研究所設計競技では、内田祥三・佐藤功一が審査を行っているものの様式を限定する要項は無く、当選案も様式的装飾を持たない平滑な壁面によって構成された案が入選する結果となっている(図3)。1930年代後半は、近代建築も広く受け入れられつつあり、それまで日本趣味推進派と思われていた審査員も、その存在を認めつつあったといえよう。つまり、建国記念館設計競技においては、近代建築が根付きつつある中で、「日本を基調とした様式」「勾配屋根」を明記することによって、その立場を明らかにしたものであり、逆に、近代建築の存在感が明らかになっていることは注目に値しよう。

図2 朝鮮25周年美術館設計競技一等案(矢野要) 透視図

図3 愛育研究所設計競技二等案(羽石渡) 透視図

以上の規定を踏まえて考案された案は、図面と設計主旨を用いて表現するよう定められた³³⁾。1930年代初頭の日本趣味建築設計競技には、提出図面中に1/20の主要部詳細図が含まれるのが常套であったが、要求図書にこれを含めない競技が徐々に増え、先の神戸市公会堂設計競技に続き、建国記念館設計競技でも詳細図は要求されなかった³⁴⁾。様式を規定する用語に確認されたように、外観意匠を重視した意匠の提案を求められたが、1/200で表される全景の意匠によってのみ「日本らしさ」を表すことが求められたのである。

以上より、建国記念館設計競技の募集規定は、1930年代初頭に行われた日本趣味建築の募集規定と同様の様式・審査員・参考平面図といった枠組みを持ちながらも、勾配屋根の要求や、詳細図が要求されないなどの差異が認められる。ここには、近代建築の台頭を意識して精査された形跡が読み取れ、勾配屋根や外観を重視することを肯定し、近代建築と並列して存在し得る意匠として、日本趣味建築を求めた競技であったといえよう。

4. 応募案にみる応募者の意向

提出された応募案108案のうち、当選案13案は1937年6月発行の『建築雑誌』に掲載されている。翌1938年発行の『図集』には、当選案に加え選外案26案の合わせて39案が掲載されており、佳作案を含む当選案は平面・立面・断面図と透視図、選外案は透視図のみ、設計主旨の掲載は一等のみであり、その内容は外部意匠に注目した図録としての性格が強い。ここで、39案について外観意匠の傾向をまとめたのが表1である。

『図集』に掲載された案は、表1から明らかなように、選外案を含めた全てに勾配屋根がみとめられる。また、参考平面図も踏襲されており、両翼を東西に広げ中央部に主出入口を設けるという概形が全ての案に見られる。審査委員長の佐野利器は、応募案の傾向を3種に大別しており、「城郭建築に基づいて結果を得ようとした人、例えば軍人会館の傾向」・「寺院建築に基づいて帝室博物館の傾向を発展したもの」・「神社の形態からヒントを得て考究したもの等」と統括しているので³⁵⁾、この分類に依って応募案を検討してみよう。

■既出発展案

まず、「城郭建築」に基づいた案の例として挙げられた「軍人会館の傾向」をもつ案は、入母屋屋根の形状により分類されたものと推測できる。また、「帝室博物館の傾向」を踏襲した案は屋根形状のみで見分けることは困難だが、切妻の瓦屋根を持つ案はいくつか確認できる。これらは既出の日本趣味建築設計競技応募案を発展させた案としてまとめられよう。

軍人会館を想起させる入母屋屋根を持つ案としては、三等二席案が挙げられる(図4)。中央部に入母屋屋根を持ち、白く平滑な壁面には凹凸によって列柱が表現されている。また、一階の開口部下の基壇や、屋根と壁面が接合する部分がややセットバックして作り出す帯状の影は、壁面を三層に分割している。装飾は少なく簡素であるが、佐野の記述に「壁の扱いは大変洋風」と記されていることから、西洋風の意匠として認識されていたことが読み取れる。他に入母屋屋根を持つ3案はいずれも、中央部の屋根以外には日本的表現を持たず、これのみで日本らしさを表現している。また、同様の壁面表現を持ち、屋根形状のみが異なる選外案のひとつ(図5)は、中央部に方形屋根を持ち、その意匠は軍人会館と同年に行なわれた大礼記念京

都美術館設計競技の一等当選案(前田健二郎)と酷似している。壁面の浅い凹凸や基壇と柱頭部分に設けられた開口部は西洋様式建築を想起させ、日本の木造建築由来の表現は見られない。壁面意匠に幅はあるものの、中央部の屋根のみに日本らしさを担わせる案は他に、当選案に2案、選外案には16案あり、約半数を占める。

表1 当選案・選外案における外観意匠の傾向

順位	屋根	軒	壁	高さ比(屋根:壁)	日本的モチーフ	日本を表す部位
1等	切	○	校倉	1:1.5	神社	全体
2等1席	切	○	校倉	1:0.9	神社	全体
2等2席	切	○	石造	1:2.8	—	全体
3等1席	切+千	○	石造	1:1.6	櫓	全体
3等2席	入	×	洋風	1:6.5	城郭	屋根
3等3席	切	×	校倉	1:2.2	神社	全体
3等4席	切+千	○	石造	1:1.9	寺院	全体
佳作1	切	○	木真	1:0.8	神社	全体
佳作2	切+千	×	洋風	1:3.3	寺院	屋根
佳作3	入	○	—	1:3.3	城郭	屋根
佳作4	入	×	—	1:4.2	城郭	屋根
佳作5	方	×	—	1:1.1	—	屋根
佳作6	切+千	○	木真	1:1.6	櫓	全体
4	方	○	洋風	1:5	寺院	屋根
5	方+千	○	—	1:1.9	寺院	屋根
10	切	○	石造	1:3.4	寺院	全体
11	方	○	木真	1:8.2	寺院	全体
16	方	○	—	1:7	—	屋根
20	方	○	石造	1:3.3	寺院	全体
25	方	○	洋風	1:6.3	—	屋根
26	切	○	木真	1:0.9	神社	全体
30	方	○	—	1:5.7	寺院	屋根
35	切+千	○	石造	1:1.7	寺院	全体
39	切	×	石造	1:3	—	全体
44	寄	○	洋風	1:6	—	屋根
45	切+千	○	洋風	1:1.3	—	屋根
52	切	×	洋風	1:4.7	寺院	屋根
54	切	○	洋風	1:0.9	寺院	屋根
61	方	×	—	0:0	—	屋根
68	切	×	—	1:1.8	神社	屋根
72	切+千	×	洋風	1:3.7	神社	屋根
73	切	○	木真	1:5.7	—	全体
79	切+千	×	石造	1:4	寺院	全体
82	切	×	洋風	1:4.1	寺院	屋根
84	切	×	洋風	1:2	寺院	屋根
86	方	×	洋風	1:9.8	—	屋根
90	切	○	木真	1:1.6	寺院	全体
98	切+千	×	洋風	1:2.1	寺院	屋根
107	入	×	洋風	1:3.7	城郭	屋根
合計 39案						
(表注)【順位】選外案は図集に記載されている番号。【屋根】中央部の屋根形状。「切」切妻、「入」入母屋、「方」方形、「寄」寄棟、「千」千鳥破風。【軒】「○」軒の出あり、「×						
軒の出なし。【壁】「校倉」校倉造り風表現。「石造」組石造風表現。「洋風」西洋風表現。「木真」木造真壁。「—」いずれにも該当しないもの。【高さ比】立面に占める高さの比率。透視図から図法により計測。両翼部分。【日本的モチーフ】審査評の分類(神社、寺院、城郭、櫓)より選択。「—」はいずれも想起させないもの。【日本を表す部位】日本的モチーフを体現する部位。

図4 建国記念館設計競技三等二席案(片山節義) 透視図

図5 建国記念館設計競技選外4案(作者不明) 透視図

このような既出案の基となっている、1930年代初頭に行われた日本趣味設計競技当選案の意匠は、どのような意図をもって表現されていたのであろうか。1930年に行われた大札記念京都美術館設計競技の審査報告には、「吾人が超望して居るものは日本の意匠を基調とし、(中略)日本様式の精神を木材以外の材料を以て表現」³⁶⁾したものであると述べられており、当選案10案のうち、壁面に木造表現が認められるものは木造真壁が表現された佳作案1案のみである。また、応募案には「純日本木造建築の様式を其儘再現」・「支那印度」・「新様式の創案を得んと努力せるもの」³⁷⁾があったとされることから、木造表現が審査員によって選り分けられ、これを当選から退けたことが読みとれる。このような木造表現を避ける傾向は、1931年4月を期限として募集された帝室博物館設計競技当選案にも引き継がれ、よりはっきりとその傾向を読み取ることができる。帝室博物館当選案の屋根は全て軒の出が少なく、壁には木造表現はいずれの案にも見られない³⁸⁾。一等案(渡辺仁)の設計主旨には、設計意図が以下のように表現されている。

従来企てられたる日本趣味の混凝土建築は木造表現に重きを置かれたる共、大建築に於いては構造上寧ろ、石造表現を妥当と信じ詳細に至る迄是に留意して設計せり³⁹⁾

このことは意匠にも反映されており、一等案には、壁面頂部が丸みを帯びるなど「石造表現」が施されている様子が見て取れる(図6)。その他の当選案には、西洋様式を思わせる列柱が表現された案が1案、窓上部の庇や仕上げ材で壁面に変化を持たせる案が6案、装飾や凹凸を排除し、より平滑で簡素な壁面表現の案が2案確認できる。

図6 東京帝室博物館設計競技一等案(渡辺仁) 詳細図

さらに、渡辺がここで言及した「従来」の日本趣味建築とは、どのような表現だったのだろうか。明治神宮宝物殿設計競技を例としてみよう。明治神宮宝物殿設計競技は1915年(大正4年)に行われ、募集要項には様式の規定や、伊東忠太をはじめとする大正期の日本趣味建築設計競技における常連の審査員の顔ぶれ、参考平面図の配布、耐震耐火構造が要求された、典型的な「日本趣味」設計競技である⁴⁰⁾。当選案は全て反りのある深い軒の屋根を持ち、軒下には垂木や木鼻の表現、壁面にも校倉や欄干といった木造建築由来の日本のモチーフがふんだんに盛り込まれている(図7)。このような意匠と比較すると、帝室博物館の当選案にみられる特徴は、木造建築由来の装飾が見られないことだけでなく、壁面は装飾や凹凸が少なく平滑であり、屋根は反りも軒の出もなく非常に控えめであったことも挙げられる。当選案発表時に帝室博物館設計競技当選案を統括した

川喜田煉太郎の評に、「少なくともこんどは、軒を長く出して、在来の日本趣味の効果を大きな軒と化粧垂木の鼻によって強調して、その代わりライトはトップにする…といったヤマは全く失敗らしい。日本趣味のフルイからおちた多くの応募者の案が、そうだったらしい」⁴¹⁾とあることから、審査員の意向によって取捨選択されたことが伺える。また、壁体が平滑なことに関しても「割合に技巧を施さない形態が少なくとも簡単、明快を旨とする近代建築に一步近寄っている」⁴²⁾と評されたように、一等案以外の設計主旨にも「簡明」「虚飾を廃し」「必要以外の華飾及び復元的手法を排し」⁴³⁾などの記述が見られることから、応募者の中に、意図的に装飾を避け、簡素な壁面表現を施すべきとの共通の認識が伺える。

図7 明治神宮宝物殿設計競技三等案(後藤慶二) 透視図

このように、1930年代初頭に行われた日本趣味設計競技においては、従来の木造表現を否定的に捉える審査員の意向やそれに応える応募者の案がひとつの傾向を作り出し、軒の出の少ない勾配屋根、木造表現を施さない壁面、細部装飾の簡略化といった特徴を持つ意匠が「定型」化していた、とまとめられよう。

以上の傾向をふまえて、改めて建国記念館設計競技における既出発展案とは、1930年代初頭に形成された「定型」を踏襲しつつ、壁面装飾の簡略化がよりすすんでいることが特徴として挙げられよう。この要因としては、詳細図が求められなかったという規則による要因や、あるいは戦局を意識して、虚飾を排した旨を主張しようとする、時代を反映した設計者の意図とも考えられよう。その結果、中央部の屋根が際立ち、よりアイコン的な表現となっている。また、勾配が緩く軒の出もない方形屋根を持つ案(表1、61)など、過去の様式とは類似しない消極的な屋根表現も認められるが、佳作案を含めた当選案は、「何れも相当日本味を出し」ているものとして選ばれていることから、「勾配屋根＝日本らしさの象徴」という意識が審査員に強く根付いていたといえよう。

■新出案

「神社の形態からヒントを得た」案は、切妻屋根の案のうち千木や堅魚木といった装飾によって判別できる。佐野利器は、これまでの日本趣味建築設計競技に比べ「相当に多く目についた」と述べ、建国記念館設計競技では、『図集』に掲載された39案のうち、7案が神社をモチーフとしており、そのうち4案が当選案に含まれていることが確認できる。その他の案の傾向は、「城に基づくもの、櫓を重ねたようなものあり、又かなり洋風がかったものもあった」と佐野が記したように、さまざまなモチーフを扱った案が乱立している。これらはこの設計競技における新出の傾向である。

新出案の傾向は、既出発展案にみられた消極的なモチーフの扱いとは異なる。まず一・二等案を見ると、共に軒が深く立面を大きく占める切妻屋根を冠する塔状の部分が強調されて表現されている(図8)・(図9)。既出発展案にみられたような、軒の出の少ない、城

郭や寺院由来の瓦屋根の扱いとは異なり、反りの無い大きな切妻屋根が両翼にも張り出している。特に二等一席案(高梨勝重)では、屋根面に開口部を設けることで三階部分を小屋裏に取り込んでおり、屋根が肥大化し、より強調されている。また瓦を用いないことで表面や棟端部に瓦特有の装飾的表現がなくなり、透視図では淡く色を載せた平滑な面として表現されている。この簡素で平滑な屋根表現も特徴的である。一方壁面は、水平に積み重ねられた三層の壁面表現にはなっているものの、西洋様式の三層構成を想起させる表現ではない。また、欄干・校倉といった木造を思わせる表現もみられる。この一・二等案は共に高梨の案であり、神社由来の切妻屋根・校倉風の壁という同じモチーフを用いながら、それらのバランスを変えることで、より日本的な表現を模索しているといえる。一等案は設計意図が記載された唯一の案であるが、外観意匠に関しては「唯一にして簡明な住吉造りを参照にしてこれを発展せしめ」と記述している。具体的な由来元を明記することで日本独自の表現であることを強調し、「簡明」からは虚飾を排することを良しとする時代に同調する姿勢を明らかにしている。

図8 建国記念館設計競技一等案(高梨勝重) 透視図

図9 建国記念館設計競技二等一席案(高梨勝重) 透視図

同じく切妻屋根と校倉風の壁を用いた案で、壁体をデザインの主題とした案が三等一席案にみられる(図10)。この案では屋根は壁面端部よりセットバックしており、水平線を多用する校倉に似た壁面が特徴的に表現されている。壁面表現に特徴のあるデザインは、他に木造真壁を表し神社屋根を持つ案が佳作案(表1、佳作1)に見られる。またあるいは、両翼の立面をセットバックして表側に丸柱の列柱廊を表現した案など(図11)、具体的なモチーフを強調して表しており、これによって「日本らしさ」を表現している。これらは、勾配屋根面にトップライト等の開口部を採ることで軒下に開口部を設けないよう配慮しており、これによって、軒の深い屋根と木造由来の壁面表現を実現している。他にも、櫓を思わせる重層の屋根を持

つ案や(表1、佳作6)、土壁の蔵を思わせる形態を複製し集積した案(表1、3等1席)なども同様に、日本建築に特徴的な形態を強調して用いた案が当選案13案中8案を占めており、そのうち5案が佳作以上であることから、このような新出の傾向を持つ案が審査員に好まれたことが読み取れる。

ここで注目すべきは、形態の扱い方であろう。従来の木造表現では、基壇・壁・軒・屋根といった建築の構成要素の役割やバランスを保ちながら、強調や抑制といった操作が行われており、屋根や壁の扱いに大きな違いは見られなかった。一方新出案では、屋根を肥大化する、壁を肥大化する、あるいはそれらを複製したり集積したりするなど、各々の要素が本来持っていた役割から解放し、新たな表現を模索している様子が見られる。これは立面における屋根の占める割合が案によって大きく異なることから、明らかである。

図10 建国記念館設計競技三等一席案(永井孝直) 断面図及び透視図

図11 建国記念館設計競技佳作案(大澤浩) 断面図及び透視図

以上のように、建国記念館設計競技応募案には、既存の日本趣味建築設計競技案には見られなかった、新出の傾向を持った表現が確認された。その特徴は、壁面にも日本的表現を表し、建築全体の「形」によって日本らしさを表すものとまとめられよう。このような傾向がうまれた要因を推測すると、直接的には、規則における「勾配屋根」の明記と、万国博覧会会場での近代建築との対比が考えられる。これらが勾配屋根をはじめとする伝統的モチーフの使用を肯定的に捉える土壌を用意したのではないだろうか。また、1935年に行なわれた、神戸市公会堂設計競技の審査報告にある「当局の希望として日本趣味の加味に付き考慮を求めたる結果は(中略)生硬にして生気なき、形式的のものと評せざるを得ず」という不満の声や、内田・武田といった共通の審査員がいることを考慮し、より思い切った表現を試みようとした一因となったとも考えられよう。また、採光技術の向上によってトップライトの施工が可能になり⁴⁴⁾、軒下に開口部を設ける以外の選択肢が与えられ、自由な表現を可能にしたのかもしれない。詳細図が要求されなかったことも、大振りな「日本趣味」表現を助長したとも考えられる。

このようなさまざまな要因が、木造建築における日本独自のモチーフに改めて目を向けさせ、これを主題としてより自由に表現する土壌をつくりだしたと考えられる。

5. 結語

本稿は、1937年に行われた建国記念館設計競技の検証を通して、以下のことを明らかにした。

建国記念館設計競技の募集規定は、従来の日本趣味建築設計競技と類似する規定の中に、勾配屋根の要求や、詳細図が要求されないなどの差異が認められた。ここには、近代建築の存在を意識した審査員の意向が読み取れた。

また応募案は、日本趣味建築の「定型」ともいえる傾向を持つものの他に、新出の傾向を持つものが確認された。まず「定型」における意匠の特徴は、勾配屋根を持つこと、木造表現を避けること、簡素であることの3点が挙げられた。これはそれぞれ、募集規定に応えたもの(勾配屋根)、従来の日本趣味設計競技の傾向を汲んだもの(木造表現を避ける)、経済性を求める時代を鑑みたもの(簡素)と性格づけられよう。これは、当選を目的とする応募者が、昭和初期の特に1930年代初頭において行われた日本趣味建築設計競技の審査評や当選・落選案中に傾向を見出し、繰り返された設計競技によって徐々に形成されていった「定型」であった。この傾向は大正期の日本趣味建築設計競技応募案にルーツを持ち、屋根は軒の出が深く反りがあり、壁は木造建築を模した装飾的な表現であったものが、1930年代初頭になると、屋根は軒の出や反りが無く、壁は装飾が抑えられた西洋様式の表現や、それすら想起させない平滑な壁面を用いる意匠に移行した。建国記念館設計競技応募案では、壁面細部の簡略化がさらにすすめられ、屋根はより形式的な存在となった⁴⁵⁾。

次に新出の傾向における意匠の特徴を整理すると、まず、それまでの日本趣味建築が避けてきた木造表現を積極的に表していることが挙げられた。屋根は「定型」案のようなアイコニックな扱いではなく、誇張や重複などの演出が加えられ、木造真壁や校倉といった木造表現とともに、建物全体で日本らしさを表そうとする表現であり、これは審査員にも好まれた。モチーフを肥大化し特に強調して表現する手法は、日本趣味建築の「定型」のように建築の構成要素に捕われることのない、自由な発想である。このような新たな傾向が現れた要因としては、募集要項にも存在感を表していた近代建築の影響が考えられよう。建築全体を量塊として認識し、自由な平面計画を反映した近代建築の実例を目にする機会も増え、基壇・壁・軒・屋根といった役割を担う各部分の「形」ではなく、建築全体の「形」を認識する視点がうまれていたと考えられよう。ここに、万国博覧会という国際的な大事業や戦時体制という状況によって強く意識された「日本らしさ」が加わり、新たな日本的表現がうみ出されたのではないだろうか。

日本趣味建築はこれまで、1930年代初頭に行われた設計競技に注目され、その意匠の特徴が論じられてきたが、建国記念館設計競技応募案の分析を通してその意匠的展開を追うことで、従来の日本趣味建築には見られなかった新たな傾向がみとめられたことは、注目すべきことである。この新傾向は1930年代以降の日本趣味建築と1940年代の大東亜建設記念営造計画、在盤谷日本文化会館設計競技との結節点として位置づけられる。

1942年に行われた大東亜建設記念営造計画の審査評において、前川國男は丹下健三の案を、神社の形態とこれが抱かせるイメージとを巧みに用いた案として評価した。またこれを「幸福な場合」⁴⁶⁾と表現したように、的確なモチーフの選択と、具象・抽象の均衡が

極めて難しい手法であることが自覚された。しかし、具象的表現が抱かせる「日本らしさ」の効果が絶大であることもまた、他当選案との比較から明言している。同審査評で、それまで正しく行われて来なかったと前川が述べた「伝統の具象的把握」とは、伝統の「形」のみを指すものではないが、「形」を見過ごして成り立つものでもない。建築における「日本らしさ」を意匠的観点から考える時、「形」を常にその主題としてきた日本趣味建築が、1937年の設計競技において、世界を意識する中で、「勾配屋根」のみならず多様なモチーフに目を向け、建築全体で「形」を表現し、またこれを評価する視点が存在していたことは、日本趣味建築にも「幸福な場合」をうみ出す素地があったと言えよう。戦時下の設計競技における前川・丹下の日本のモチーフの表現は特異例ではなく、1930年代の傾向の延長線上に位置づけられるのではないだろうか。

注

- 日本萬國博覧会編：『紀元二千六百年記念 日本萬國博覧会 肇国記念館懸賞競技設計図集』, 洪洋社, 1938 によれば、「本競技募集時は建国記念館の名を以てされ、当選案発表後に於て肇国記念館と改称せられたるを以て、本図集の表題は肇国記念館の名称を用ひ、募集規定等解消以前に於けるものは旧称を使用す」とある。本稿では発表以前からこれを扱うため、全て「建国」の表記とした。
- 建築学大系編集委員会：『建築学大系6』, 彰国社, 1958, pp. 320～326。建築学大系編集委員会：『新 建築学大系5』, 彰国社, 1993, pp. 439～441。稲垣栄三：『日本の近代建築—その成立過程—』, 丸善, 1959, pp. 273～280 などが挙げられる。
- 「合理主義の方向転換」(前掲『日本の近代建築—その成立過程—』)において、昭和初期の近代建築の敵手として日本趣味を挙げ、1930年～1931年に行なわれた設計競技によってこの特徴を論じている。応募案と実施案には時間的・意匠的に隔たりがあるが、特徴的な意匠を示す例として同位に扱われていることは、問題視されるべきであろう。『建築学大系6』『新 建築学大系5』においても同様である。
- 川道麟太郎、橋寺知子：「明治末に論じられた『日本趣味』発言の手法論—明治期の建築界における『日本趣味』の概念Ⅱ—」, 日本建築学会論文報告集, 444, 1993. 2。
- 近江栄：『建築設計競技—コンペティションの系譜と展望—』, 鹿島出版会, 1986。
- 1930年に行われた設計競技は、大礼記念京都美術館・日本生命館・軍人会館・東京帝室博物館が挙げられるが、これらは以下の図集にまとめられている。日本建築協会編：『日本趣味を基調とせる最近建築懸賞図集』, 日本建築協会, 1931。また、ここに名古屋市庁舎(1930)や、尾張徳川美術館(1931)を含める論もあり、近江は昭和5・6年を指して「民族主義思潮の興隆期」と表現している。
- 大川三雄：『日本趣味への傾倒』, 『近代和風建築』, 鹿島出版会, pp. 192～195, 1988。
- 大川三雄：『日本趣味の潮流』, 『近代和風建築—伝統を超えた世界—』, 建築知識, pp. 150～153, 1998。
- 藤岡洋保：「昭和初期の日本の建築界における『日本的なもの』—合理主義の建築家による新しい伝統理解—」, 日本建築学会論文報告集, 412, 1990. 6。藤岡は「日本趣味の建築」を以下の特徴を持つものとして規定している。
 1. 具体的なもので「日本的なもの」を表現、
 2. その「具体的なもの」には社寺建築に由来するモチーフを多用、
 3. 西洋の技術を積極的に利用。いわゆる「帝冠様式」の建築もこの系譜に属するものとの理解を示している。なおこの規定は、前掲の川道・橋寺の論において、統括されている。
- 布野修司：「国家とポスト・モダニズム建築」, 『国家・様式・テクノロジー—建築の昭和—』, 彰国社, 1984。
- 「丹下健三と戦後建築」(前掲『国家・様式・テクノロジー—建築の昭和—』)において「日本的なるもの＝ナショナルなものを象徴する勾配屋根を受け入れることにおいて、日本の近代建築家はある転向を遂げた」と表現していることから、この論における勾配屋根に対する確立されたイメージと、日本趣味と近代建築が本質的に断絶しているという見解が明らかである。
- 浜口隆一：「日本国民建築様式の問題」, 『新建築』1～4月号, 1944、などが挙げられる。

- 13) (前掲) 建築学大系編集委員会：『建築学大系6』, 彰国社, 1958, pp. 325。
- 14) (前掲) 稲垣栄三：『日本の近代建築—その成立過程—』, 丸善, 1959, pp. 286
- 15) 1930年代に行われた設計競技は以下のとおりである。(前掲) 近江栄：『建築設計競技—コンペティションの系譜と展望—』 巻末資料、『建築雑誌』、『満洲建築雑誌』等をもとに記載。

付表 1930年代に行われた設計競技

年号	設計競技名	種	様式指示	要求図面
1930	名古屋市庁舎	庁	—	配平立断詳透
	共同蔵舎	蔵	—	配平立断詳一
	日本生命館	商	東洋趣味を基調とする現代建築	—平立断詳透
	大礼記念京都美術館	美	周囲の環境に應じ日本趣味を基調とすること	配平立断詳透
	明治製菓売店(本郷)	商	近代式の簡素なるものを撰び壁体は白色を基準	—平立断詳透
	蔵前工業会館	会	—	—平立断詳透
	軍人会館	会	様式は随意なるも容姿は国粋の気品を備え荘厳雄大	配平立断詳透
	東京帝室博物館	美	建築様式は(中略)日本趣味を基調とする東洋式	配平立断詳透
	明治製菓売店(銀座)	商	近代的の簡素なるものを撰び壁体は白色を基準	—平立断詳透
	日本放送関西支部局舎	社	(不明)	(不明)
1931	尾張徳川美術館	美	様式は周囲の環境に調和すべき	—平立断一透
	朝鮮貯蓄銀行本店	銀	様式は任意とす	—平立断詳一
	第一生命保険相互会社	社	生命保険会社の性質と周囲の環境とを考慮	—平立断詳透
	エジソン翁記念碑	碑	(不明)	(不明)
	東京水交社本館	社	(不明)	(不明)
	東京放送会館	会	(不明)	(不明)
	日本タイプライター社社屋	社	華美虚飾を避くと雖も雄大荘重威厳の風を尚び	—平——一透
	東京市庁舎	庁	帝都市民自治の殿堂たることを適当に表徴す	配平立断一透
	新京忠霊塔	碑	様式は随意	配平立——一透
	静岡県庁舎	庁	—	配平立断一透
1935	満鉄労働社員記念碑	碑	(不明)	(不明)
	名古屋観光ホテル	ホ	(不明)	(不明)
	大東京建築祭 銀座街共同建築	商	様式を如何にすべきかの問題を此処に提出するもの	—平立断詳透
	教育塔	碑	建築意匠の様式は自由	配平立断一透
	土木建築事業殉職者慰霊塔	碑	様式は随意	—平立断一透
	新京公会堂	会	(不明)	(不明)
	神戸市公会堂	会	(不明)	配平立断一透
	朝鮮25周年記念博物館	美	四周の環境に適応せしめ東洋趣味を加味せしむ	配平立断詳透
	徳島市公会堂	会	—	配平立断一透
	ひのものと会館	会	質実明朗(中略)宗教的雰囲気が必要とせず	配平立断一透
1936	森永キャンパスストア	商	(不明)	(不明)
	養育研究所	社	—	配平立断一透
	戦跡記念碑	碑	質実剛健、飛躍日本及び満洲事変の意義を表現	配平立断一透
	満洲国訪日記念	碑	東洋式を基調とし日満両国の融和の精神を表現	(不明)
	満鉄教育塔	碑	(不明)	(不明)
	昭和製鉄事務所本館	社	様式は任意とするも躍進鉄都鞍山を考慮する事	—平立断詳透
	万国博覧会建国記念	美	日本精神を象徴したる荘厳雄大なるものたるべし	配平立断一透
	1938 新京銀行	銀	(不明)	(不明)
	大連市公会堂	会	表現の形式は随意なるも「ミナト」大連にふさはし	(不明)
	新京工業会館	会	(不明)	(不明)
1939	忠霊塔	碑	意匠は素朴、簡明を旨とし	配平立断一透

(表注) 【年号】 競技応募締切年。【種】 「庁」庁舎、「蔵」馬屋、「商」商業ビル、「美」美術館・展示室、「会」会館・公会堂、「社」社屋、「銀」銀行、「碑」記念碑、「ホ」ホテル。【様式指示】 『建築雑誌』記載の募集要項により確認できるものを記載。「—」記載なし、「(不明)」確認できない場合。【要求図面】 配置図・平面図・立面図・断面図・詳細図・透視図のうち要求されていない図面を「—」で表記。

- 16) 近江は(前掲)『建築設計競技—コンペティションの系譜と展望—』において、ブルーノ・タウトによる神社建築評価が日本の建築界に及ぼした影響を論じる中で、建国記念館設計競技応募案中の神社モチーフに言及している。井上章一は「戦時下日本の建築家：アート・キッチュ・ジャパネスク」, 朝日新聞社, 1995 の中で神社を評価する建築界の動きと本設計競技当選案とを結びつけおり、当選案中の屋根以外の意匠にも言及しているものの、いずれの論も、「日本趣味建築」のモチーフが寺院・城郭に加えて神社が注目されたことを説明するにとどまっている。
- 17) (前掲) 日本萬國博覧会編：『紀元二千六百年記念日本萬國博覧会 肇国記念館懸賞競技設計図集』, 洪洋社, 1938
- 18) 日本万国博覧会事務局編：『万博』, 1935～1944。
- 19) 「日本趣味建築」の定義に則して「日本趣味建築設計競技」を定義するなら、「『近代の建築』に『日本的表現』を施すことを要求した設計競技」といえよう。「近代の建築」は耐震耐火構造や鉄筋コンクリート造など具体的に示されたり、「日本的表現」は後述のように「日本趣味」などのさまざまな語で表現された。
- 20) 紀元二千六百年記念日本万国博覧会事務局編：『紀元二千六百年記念日本万国博覧会概要』. 紀元二千六百年記念日本万国博覧会事務局, 1938。
- 21) 「本博覧会の開催延期」, 『万博』, 紀元二千六百年記念日本万国博覧会事務局, 1938. 7。
- 22) 「進捗した東京会場工事」, 『万博』, 紀元二千六百年記念日本万国博覧会事務局, 1938. 7。
- 23) 「建国記念館建築設計図案懸賞競技審査委員会」, 『内田祥三関係資料』,

- 建国記念館建築設計図案懸賞競技審査委員会, 1937。ここに、4通の遅延があったことが記録されている。暗号表記場所や切り抜きなどのミスもそれぞれ1通づつあるが、審査にて全て同等に扱うこととされ、応募案総数は108通となった。
- 24) 「建国記念館賞金贈呈式」, 『万博』, 紀元二千六百年記念日本万国博覧会事務局, 1938. 1。
- 25) 「東洋趣味」(日本生命館)、「日本趣味」(大礼記念京都美術館)、「国粋の気品」(軍人会館)、「日本趣味を基調とする東洋式」(東京帝質博物館)。以上1930年に募集開始。「日本趣味」(神戸市公会堂)、「東洋趣味」(朝鮮25周年記念博物館)。以上は1935年に募集開始したもの。
- 26) 「入選者の言葉」, 『万博』, 紀元二千六百年記念日本万国博覧会事務局, 1937. 12。一等・二等二席当選の高梨勝重、二等二席当選の清岡宏彰の言葉が掲載されている。
- 27) 競技に先立ち、会場計画委員会によって、会場の主要建築物の配置や様式が審議された際の記録には、建国記念館の敷地である「四号地」の主要建築物を「日本風の建築様式」とする一方で、隣接する「五号地」の主要建築物は「近代建築様式」として「彼此大正の妙を発揮せしめ」という主旨が記録されている。紀元二千六百年記念日本万国博覧会事務局編『紀元二千六百年記念日本万国博覧会概要』, 1938 による。
- 28) 『建築雑誌』でその募集要項が確認できる日本趣味建築設計競技のうち(注15、付表参照)、募集要項に「勾配屋根」を明記したものは本稿で扱う建国記念館設計競技以外に確認できない。しかし、東京帝室博物館設計競技で募集要項には記載されていないが、要項の審議の際、勾配屋根は必要だろうとの意見があがりこれに審査員全員が一致したとの記録が残されている。また、採光方法は「トップライトは必ずしも必要とせざること」との意見が上がり、要項には「採光方法は特に重視す」と記載された。この審議会で、「日本趣味を基調とする東洋式」という用語も決定した。東京国立博物館:『東京国立博物館百年史』, 1973による。
- 29) 1930年代初頭にも、平面計画の提案を求める競技も行なわれた。明治製菓売店建築設計競技はそのひとつである。佐藤武夫はこれを、「今度の競技ではプランの創意に重心がおかれた。従来の兎角募集側から与えられた参考プランに変更を加えない習慣は打破されるべきである。」と評している。「明菓の建築懸賞競技」に就て」, 『国際建築』, 1931. 11。による。
- 30) 神戸市:「神戸市公会堂建築設計競技当選及佳作図案 審査報告」, 『建築雑誌』, 1936. 3。
- 31) その他の審査員は、新蔵利広(商工省商務局長)、衣斐清香(東京市土木局長)、吉山眞倬(日本万国博覧会総務部長事務取扱)、福田重義(日本万国博覧会工営部長)(順不同)。
- 32) (前掲) 近江栄:『建築設計競技 -コンペティションの系譜と展望-』, 鹿島出版会, 1986。
- 33) 配置図(縮尺1/500)、各階平面図(1/200)、立面図3面(1/200)、断面図2面(1/200)、透視図、設計説明書が求められた。図面の大きさは105cm×75cmとされた。
- 34) 1930年代において、詳細図を求めない設計競技として確認できる最も早いものは、1931年の尾張徳川美術館設計競技である(注15、付表参照)。それ以前に確認し得る9つの設計競技では、様式の指定・未指定に関わらず全て詳細図を要求している。また、本稿で言及した、神戸市公会堂、愛育研究所は詳細図を要求せず、朝鮮25周年記念博物館では要求された。資料は『建築雑誌』による。
- 35) 佐野利器:「建国記念館懸賞設計図の審査を終えて」, 『建築雑誌』, 1937. 12、『万博』, 1937, 12。
- 36) 「京都市美術館建築図案懸賞募集審査報告」, 『建築雑誌』, 1930. 9。
- 37) 同上。
- 38) 「東京帝室博物館懸賞競技当選図案」, 『建築雑誌』, 1931. 6。
- 39) 「東京帝室博物館建築設計懸賞応募図案説明書 一等 渡辺仁」, 『東京帝室博物館建築懸賞設計図集』, 東京帝質博物館復興翼賛会, 1931。
- 40) 明治神宮宝物殿設計競技と日清生命保険株式会社設計競技に関しては以下の論に詳しい。藤岡洋保:「明治・大正期の日本の建築界における『日本的なもの』-『日本趣味の建築』-」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 9032, 1987. 10。
- 41) 川喜田煉太郎:「帝室博物館のコンペチション」, 『国際建築』, 1931. 6
- 42) 同上。
- 43) 「東京帝室博物館建築設計懸賞応募図案説明書 二等 海野浩太郎」「(同)三等 塚田達」「(同)佳作 中村順次郎」, 『東京帝室博物館建築懸賞設計図集』, 東京帝室博物館復興翼賛会, 1931。
- 44) 建国記念館では募集規定に「頂側光式(top side light)」が指定されてい

- たが、同様の採光方法を用いて勾配屋根に開口部を設けた大阪市美術館が1936年に竣工し、最新の採光方法として『建築雑誌』に紹介されている。「採光方法に留意」との規定ともあわせて考えると、当時の最先端技術を率先して用いようとする向きが応募者に現れたことは容易に想像できる。
- 45) 石田潤一郎は「大正・昭和戦前期の府県庁舎」『都道府県庁舎—その建築史的考察—』, 思文閣, 1993 の注のなかで、府県庁舎にみられる「帝冠様式」の存在根拠について興味深い考察を行っている。設計競技応募案からみた日本趣味建築においても、勾配屋根を持つことは意匠的な特徴のひとつであったが、これは「勾配屋根=日本らしい」というイメージが大衆によって確立されていなければ成立しないデザインである。しかし一方で、そのイメージが確固たるものと保証されている状況においては、モチーフを過剰に演出する必要はなく、そのモチーフがある事のみで、日本らしさを表現しているものとして認識されうということもできる。つまり、建国記念館設計競技にみられた、日本趣味建築の定型における勾配屋根の消極的な扱いとその当選は、当時の、勾配屋根に対するイメージの強さや広さを示しているとも言い換えられよう。
- 46) 前川國男:「競技設計審査評」, 『建築雑誌』, 1942. 06。

TRANSITION OF 'NIHON-SHUMI(JAPAN-TASTE)' ARCHITECTURE IN THE 1930s

Through analysis of "Kenkoku Kinen Kaikan" architectural competition held in 1937

Fumi KASHIMURA and Wataru MITSUI***

* Research Assoc., Graduate School of Fine Arts (Architecture), Tokyo University of the Arts, M.Fine Arts

** Prof., Faculty of Fine Arts, Dept. of Architecture, Tokyo University of the Arts, Dr.Eng.

'Nihon-shumi (Japan-taste)' architecture is recognized as a figurative architectural style of Japanese modern architecture representing Japanese identity through historicizing elements of Japanese temples, shrines or castles. This design appeared especially in architectural competitions in the 1910s to 1940s.

Early Nihon-shumi architecture and those in its prosperity (in 1930 and 1931) have been mentioned in previous researches which revealed its characteristic designs and a transition of those designs. However, those in the 1930s to the end of WW2 have not studied enough from architects' perspective. Hence, this paper analyzes a transition of 'Nihon-shumi' design especially in the 1930s dealing with the 1937 Kenkoku Kinen Kaikan Competition for one of the main venues of 1940 World Exposition in Tokyo. This competition could be a key competition because architects were strongly aware Japanese identity in a national event and expressed it through their designs.

Kenkoku Kinen Kaikan Competition is a typical 'Nihon-shumi' competition which requires Japanese style, gives a guide plan and is judged by conventional judges. On the other hand, this competition has some remarkable differences from past 'Nihon-shumi' competitions: 'pitched roof' is clearly mentioned on a guideline, and 1/20 detail drawing is not required. These differences represent judges' intention to make them different from modern architecture.

The winning designs are categorized into 2 types. One has narrow eaves on flat walls which is a typical expression of 'Nihon-shumi' appeared in the beginning of 1930s. And another has exaggerated Japanese traditional motifs out of traditional wooden buildings like deep eaves, pillars of a cloister or Azekura wall.

First, every typical 'Nihon-shumi' design has a pitched roof as one of the signature elements of 'Nihon-shumi' architecture. However, a pitched roof is not an original element of Japanese traditional architecture but a common element can be found in many countries. People perceive a pitched roof as a 'Japanese' design only under the circumstances that people share a common image that 'Pitched roof = a symbol of Japanese-ness'. In other words, when the image is strongly established, people easily perceive the element as it is. Typical 'Nihon-shumi' designs in this competition have pitched roofs as an iconic figure so that some of them can not be recognized as Japanese taste design when the time the image of a roof is not strong. It shows that the image of a pitched roof at that time was strong and widely shared among applicants and judges.

Another type of the designs are characterized those exaggerated elements of Japanese traditional architecture. This expression is newly found in this competition. Those elements refers from wooden traditional architecture like deep eaves with ornaments, piled-up roofs, Azekura wall or a cloister. Motifs of wooden architecture had been rejected for a long time in the wake of criticism of modernists that using these motifs was irrational and mere imitation of past buildings. However, architects supporting Nihon-shumi acknowledged that using those motifs in modern architecture was effective to express Japanese identity.

Using traditional motifs in modern architecture had been a controversial issue among architects especially in the beginning of 1930s. Japanese modernists had been criticizing it and rejected using it in their design. However, as Kunio Maekawa appraised the first winning design by Kenzo Tange at Daitoa Kyoei Ken competition (in 1942), they finally realized the power of figurative traditional elements. Also they thought it was important to interpret traditional motifs to use them accurately in modern architecture. It can be said that 'Nihon-shumi' architecture had already recognized this power and many attempts were found in Kenkoku Kinen Kaikan competition.

(2014年12月28日原稿受理, 2015年6月15日採用決定)